

## 特異的 IgE 抗体測定 of 進歩と今日的意義 —アラスタット 3g によるアレルギー検査—

立元千帆 先生

あおぞら小児科、鹿児島市立病院小児科

アレルギー疾患の診断治療には、その原因アレルゲンを確定する「アレルゲン診断」が重要であり、アレルギー診断治療のコアとなります。このアレルゲン診断の基本となるのがアレルゲン特異的 IgE 抗体の同定であり、血清中の特異的 IgE 抗体測定は、もっとも頻用される検査です。特異的 IgE 抗体の陽性は当該アレルゲンへの「感作」を示し、必ずしも原因アレルゲンと確定できませんが、アレルギーの発症や症状増悪を推定する上で、とても大切です。

本講演では、特異的 IgE 抗体とアレルギーの診断治療に関する今日的意義について述べます。特に食物アレルギーの診断は、食物経口負荷試験の進歩と普及によりこの 10 年間に大きく進歩しました。食物経口負荷試験は特異的 IgE 抗体値を参考にして判断することが臨床の現場で広く行われるようになり、負荷試験の陽性確率を示したプロバビリティ曲線が作成されています。これは抗原毎に異なり、同じ抗原でも測定法や年齢等によって異なることが分かってきました。

また、化学発光酵素免疫(CLEIA)法と液相アレルゲンにより高感度かつワイドレンジ測定が可能な特異的 IgE 抗体検査「アラスタット 3g」が広く用いられるようになり、今まで測定が困難であった乳児でのアレルゲン感作を広く検出できるようになりました。さらに、高濃度領域(100IU/ml 以上)の測定も可能となり、食物負荷試験適否の判断や免疫療法を行う上で、より詳細な患者モニタリングが可能となりました。

私たちは、多施設共同研究 (IPAD3g スタディ) によって、アラスタット 3g による食物アレルゲン特異的 IgE 抗体のプロバビリティ曲線を作成することを試みました。これは、1) プロスペクティブ研究であり、2) 対象を日常診療で最も遭遇しやすい症例とし=これによって「目の前の患者さん」に適応しやすくなる 3) 負荷試験方法を統一する (抗原性を確認した同一の負荷食品、

同一の判定基準) 4) 結果を 95%信頼区間で示す、ことから、実臨床に則した信頼できるプロバビリティ曲線が作成できます。

食物経口負荷試験は簡単に出来る試験ではありませんが、このスタディを参考とすることで、より安全で簡便に試験を行う事が可能となります。IPAD3g スタディの概略とプロバビリティ曲線の解釈について、アラスタット 3g 測定値を含めて考察したいと思います。

▽

【連絡先】 TEL : 099-295-3838(あおぞら小児科)

e-mail : <http://aozora-chiho.jp/contact/>